東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

バービードールの教育的意義に関する考察：ドールがもたらす教育的メッセージの変化：第2次ドールリフォーム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-07-06 キーワード (Ja): キーワード (En): Barbie, Ruth Handler, Charlotte Johnson, symbolic play, educational ends 作成者: 石渡, 圭子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173411

バービードールの教育的意義に関する考察

── ドールがもたらす教育的メッセージの変化：第２次ドールリフォーム ──

石　渡　圭　子*

１．はじめに

バービー（*Barbie*）はマテル（Mattel. Inc. 米国玩具メーカー，1945年設立）創始者の一人，ルース・ハンドラー（Ruth Handler, 1916－2002）が考案したファッションドールである。バービーは従来のドールが担った女性教育を刷新した。その礎を築いたのがハンドラーと衣装デザイナーのシャーロット・ジョンソン（Charlotte Johnson, 1917－1997）である。

1959年バービーは米国で発売され，女児から爆発的な支持を受け，マテルをグローバル企業に牽引した。一方，発売以来バービーはマスメディアやアカデミアからフェミニズム，摂食障害，人種・性差別，物質主義等の観点で批判の対象となった。それでも約60年間，人気は衰えず，年間150カ国で5,800万体販売され，マテル年次報告によると2019年，バービー総売上高は9億2,500万ドルである。玩具業界は競争が激しく開発研究には時間と費用を要するが，玩具の殆どが短命である。しかもドールのような伝統的な玩具はITゲーム機器と拮抗状態にある（ECSIP Consortium, 2013）。

この状況下，マスメディアやアカデミアの批判に晒されながら長寿を保つバービーは稀有な玩具である。この長寿はバービーが時代に即した教育的意義を提供していることにより維持されている。

２．本論の意義

バービーの教育的意義は社会変化に応じ推移している。本稿では発売時から1980年代前半の米国社会における教育的意義を考察する。

オックスフォード英語大辞典では教育を「知識やスキルを授けることと対照して，自己の知識や理解を向上又は発展させたり，人格や徳性，社会性を成長させること」とある。本稿ではこの定義に基づき，教育を日々の生活から主体的に学び，知識や理解を向上又は発展させ人間性，道徳性，社会性を成長させることと定義し，教育機関による制度的な教育を含めないものとする。

20世紀初頭，世界最大の玩具生産と輸出実績を誇っていたドイツで第１次ドールリフォーム（Doll Reform）により温かみを感じる丁寧な造りのベビードールが流布した（Peers, 2004）。女児に育児を疑似体験させ，将来の女性の役割を学ばせる意図があった。本稿ではファッションドール，バービーの出現を第２次ドールリフォームとみなす。バービーは着装規範や将来の職業の可能性を体現した。これが1959年から1980年代前半における米国の女児にバービーが発信したメッセージ，つまり具体的な教育内容である。女児はバービーからメッセージを受信し，女性としての社会における役割や外観を整えるという着装規範を主体的に摂取し成長した。

本稿は第２次ドールリフォームのアクターとなったハンドラーとジョンソンに焦点をあて，バービー製品化過程を動体的に分析し，バービーの教育的意義，すなわち当時の米国社会におけるバービーの教育内容の価値又は重要性を明らかにする。この課題検討のためにバービーやオートクチュールに関する文献，バービーの衣装等を資料として用いる。なお，本稿では商

＊　いしわた　けいこ　東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科 学校教育学専攻芸術系教育講座
キーワード：バービー／ルース・ハンドラー／シャーロット・ジョンソン／表象遊び／教育的意義

品名（バービー衣装には紙幅の関係で写真を掲載できないためタイトルと製品番号を記載する，例）*Evening Splendor #961*）を全て斜体で表記する。

３．第２次ドールリフォーム：ルース・ハンドラー

３．１　ファッションドール，バービーの着想点：ペーパードール

バービー製品化の端緒を開いたのはハンドラーの長女，バーバラと彼女の友人達のペーパードール遊びだった。彼女たちは幼児の顔とフォルムを表象しているベビードールやグラマードール[1]に興味を喪失し，大人を表象したペーパードールに自分の将来を投影させ遊んでいた。ハンドラーは母親として娘に立体のドールで遊ばせたいと考え，企業家として学童後期の女児はニッチな市場だと確信した。これがバービー誕生の背景である。

彼女のドール構想のポイントは５点である。①学童後期の女児をターゲットする，②ドールは女性を表象する，③着せ替えを可能にする，④衣装着脱が容易，かつ片手で動かせる小型のドールにする，⑤遊びのアリーナ（活躍の舞台）を家庭から社会に拡大する。
ハンドラーはスイスで遭遇したノベルティグッズ，*ビルド・リリ*（*Bild Lilli*, *ビルド・リリ*：以降*リリ*と表記する）に着想を得て廉価な労働力を求め，日本で生産を開始する。

３．２　バービーのプロトタイプ：*リリ*

*リリ*について“Barbie: Her Life & Times”（Boy*[2], 1987），バール人形の家博物館（Le Musée de la Maison de Poupée de Bâle）発行広報誌“Sur le podium au fil du temps: Barbie® et la mode”，“The Fashion doll”（Peers, 2004）等から概説する。

*リリ*はハンブルクのビルト・ツァイトゥング（Bild-Zeitung）タブロイド紙にラインハルト・ボイティエン（Reinhard Beuthien）が1952年から連載した１コマ漫画の主人公である。西ドイツでは女性の最終的な職業が専業主婦であると自明視され，女性の殆どが店員や事務職見習に就いた（桑原，2015）。*リリ*は事務職でありこの意味で典型的な西ドイツの女性である。合法的に女性の賃金は男性より低く設定されていた（今野，1985）ので，*リリ*は金銭目当てに裕福な年配の男性と交際し生活を享受する。その様子がユーモラスに描かれている。*リリ*は人気を博し，1955年ゲー・アンド・エム・ハウサー（G and M Hausser）社により男性対象のノベルティグッズ（7½インチと11¾インチの２種類）[3]として販売された（Boy*, 1987, Peers, 2004）。やがて子どもが*リリ*に興味を示し，購入し始めた（Tosa, 1998）。

３．３　*リリ*とバービー：ノベルティグッズからファッションドールへ

図１　*Bild Lilli*

図２　バービー　出典：Boy*, B.（1987）. *Barbie*: Her Life & Times

*リリ*とバービーは図1，図２のように類似している。ここでは，シュレシンジャーアメリカ女性史図書館に所蔵されたハンドラーの手書きメモ（Schlesinger Library, Ruth Handler's notes re: Barbie, MC 501, 34.1.），マテル技術開発者ジャック・ライアン（John Ryan）の設計図，“Barbie: Her Life & Times”（Boy*, 1987），“Barbie”（Hunter, D., & Lastowka, F. G, 2015）等を資料に相違点を分析する。

第１に技術面では*リリ*に勝っている。バービーは玩具として安全性と女児の遊びを重視し製作された。安全面ではボディを遊びに耐え得る材質に改良した。女児の遊びを考慮し，髪と付属品に工夫した。*リリ*の髪は頭部の接続部分（髪の生え際）にモヘア製の髪を挟みこみ糊付けされている（Hunter, D., & Lastowka, F. G, 2015）がバービーの髪は植毛され女児が髪のアレンジを楽しめる。*リリ*のイアリング，シューズはペイントだが，バービーのものは着脱可能である（図1）。第２にバービーはティーンエイジャーを，*リリ*は妖艶さを表象している。両者とも1960年代流行したポニーテイル姿であるが，*リリ*はカールされた一束の前髪を挙げ富士額を見せ，バービーは前髪を作り幼さを演出している（図1，2）。第３に衣装の嗜好が異なる。*リリ*は衣

装丈が短く脚を露出している。バービーの衣装は膝丈で，ハイファッションである。第4にバービーは将来の女児の可能性を，リリはその時代に生きた女性を表象している。

３．４　バービーのメッセージ：キャリア，ファッション

バービーはティーンエイジャーのモデルに設定され，その年齢や活動に相応しい衣装が用意された。女児がバービーに自分自身を投影し易くするために発売時，バービーは美しすぎず，個性を主張しないように設計された（Handler & Shannon, 1994）。

ハンドラーは保護者の女性フォルムに対する抵抗感を緩和するためにバービー遊びは女児の着装規範意識を向上させると強調した（Handler & Shannon, 1994, Oppenheimer, 2009, Gerber, 2009）。事実，子どもの着装規範意識は向上し保護者からハンドラーに礼状が寄せられている。ウエストフロリダ大学教授ロージャーズ（1999）はバービーを文化的観点で研究したが，ロジャーズの聞き取り調査によっても中学生から60代の女性（バービーと遊んだ経験者，母親等）が着装規範意識の向上を肯定している。彼女たちにとってバービーは魅惑的であり，憧れだった。彼女たちはバービーを指標にし，女性美を評価した。バービーをまるで生きた人間のようにみなし，自分のロールモデルとした。バービーストーリーを連載した“Barbie and Ken”（Mattel, 1962－1964）というコミック誌も女児がバービーの人格を創り上げロールモデル化するための情報源となった。

1900年から1950年代まで，男女の遊びは分離され，玩具も男子対象と女子対象に分けられていた。男児には科学や技術関連の玩具が豊富にあり，男児は玩具をとおして様々な職業を疑似体験できた（Chudacoff, 2007）。しかし女児にはベビードールとままごとセットしかなく，育児や家事の疑似体験しかできない（Handler &Shannon, 1994）。そこでハンドラーはバービーにより，家庭以外の女性の役割，職業を提示したいと考えた。

バービーは職業を体現することにより，“You can be anything”（「何にだってなれる」）というメッセージを女児に送り続けている。1960年*Busy Gal #981*，服飾デザイナー，1961年*Registered Nurse #991*，正看護師，1965年*Miss Astronaut #1641*，女性宇宙飛行士等にバービーは扮した。当時の女性が従事していた職業やいわゆるホワイトカラー職の体現が多く，消防士，軍隊など男女の垣根を超えた多様性ある職種を紹介するのは1990年以降である。

第2次ドールリフォームにより，学童後期の女児は自分よりも年上のドールを手に入れ，表象遊びでは自分自身をバービーに投影させ，女性の世界を空想することになる。

３．５　バービーを受け入れた米国社会

バービーが米国社会に受容されたのは経済の豊かさと社会における女性の役割の変化が関係している。

米国では第2次世界大戦後，オーブンやテレビ，オープンカー等の贅沢品を中流階級が購買可能になった（Stone, 2010）。保護者は子どもが欲しがるものを買い与えることができるようになり，祖父母が玩具を与え，孫を甘やかす風潮が始まった。婚外子や離婚が増加し，子どもの孤独な時間が増え，保護者は罪悪感から玩具を買い与えるようになった（Chudacoff, 2007）。

テレビの時代到来もバービーの普及に加担した。マテルは当時最高の視聴率を誇っていたディズニー番組「ミッキーマウスクラブ」（“Mickey Mouse Club”, 1955－1996）のスポンサーだった。玩具メーカーとして初めて全国ネットワークで1年を通じで商品を宣伝した。この結果，玩具は季節商品から店頭で常時販売される商品となった（Handler &Shannon, 1994）。折しもベビーブームが到来し，子どもを対象とする玩具市場には潜在的成長力があった。バービーやその関連商品が当番組で宣伝されると，バービーに魅了された女児の願いは前述の社会状況から保護者や祖父母により叶えられた。

母親や祖母がバービーを率先し女児に買い与え一緒に遊び始める家庭もあれば，バービーのフォルムを容認できず，購入を拒否する保護者もいた。ロジャーズ（1999）はクリスチャンの家庭について言及している。保護者にとって，バービーを女児に購入することは男児に武器の玩具を購入するときと同じ罪悪感を伴う。彼らはバービー遊びが女児に快楽や物欲を植え付けると懸念した。保護者と女児のバービー購入をめぐる闘争が長期に及ぶ家庭もあった。

サタデイ・イーヴニング誌によると年間家計所得中央値が5,660[4]ドル（U.S. Bureau of the Census, 1965）だった1964年にバービー本体は3ドル，ベイシックな衣装数は54着，1.25ドルから4ドルの価格帯で，全米25,000店において販売された。バービー衣装は家計支出の主な品目となり，衣装購入のために残業する父親数は測り知れない（Zinsser,1964）とある。バービー，一体を現在の貨幣価値に換算すると27ドルとなる。バービーを購入できる家庭は限定的であった。たとえバービーが手に入っても衣装を購入する経済的な余裕のない家庭もあった。

4．第2次ドールリフォーム：シャーロット・ジョンソン

4．1　バービーのファッション：完璧さと華やかさ

ハンドラーはバービーをとおして着装教育やキャリア教育を提供するためにデザイナーでありシュイナード美術専門学校（Chouinard Art Institute[5]）の教員でもあるジョンソンをマテルに招く。ジョンソン[6]は1957年から1980年までバービー衣装デザイン責任者を勤めた。バービーに関する文献には必ずジョンソンの名前が登場するが，管見では彼女についての研究はない。

ジョンソンは1年ほど[7]日本に滞在し，国際貿易株式会社バービー担当，田中と衣装制作アシスタントの宮塚と一緒に発売時のバービー衣装をデザインした。その宮塚（2011）の著した「バービーと私―着せ替えドレスを作り続けた半生記」が唯一，ジョンソンについての記録である。田中や宮塚（2011）は彼女を完璧主義者と評価している。

1959年から1979年まで制作された衣装の資料をマテルウエブサイトに提供した蒐集家のサラ・イームズ（Sarah Eames）は幼いころ，バービーの衣装と付属品の完璧な造りに心を奪われたと言う（Personal Communication, March 13, 2020）。蒐集家でありバービー史を研究しているブラドリー・ジャスティス（Bradley Justice, Personal Communication, March 2, 2020）も同様の理由を挙げている。完璧な造りとはオーセンティシティと精巧さにある。ジョンソンの衣装制作やその付属品は細部にまで拘りがある。ロージャーズ（Rogers, 1999）やフェミニズムやLGBTの観点からバービーを研究しているベイツカレッジ教授ランド（Rand et al.,1995）はバービーの華やかさが女児を魅了したと述べている。これはジョンソンがパリのオートクチュールをバービーに具象するだけではなく，バービーを更に美しく見せるために彼女のデザイン力を駆使し審美性を追求した結果である。

4．2　バービー衣装のオーセンティシティと精巧さ

女児の心を捉えたオーセンティシティと精巧さについて述べる。

第1にジョンソンは上質の生地を求め，ドール用生地の質感を重視し織り糸数にも拘ったという。日本人形用の金糸生地はこの意味では好都合であり，*Evening Splendor #961*（図5）に使われている。1959年に発表された数点の衣装の使われたファーは全て本物である（宮塚，2011）。

第2に全てが精巧に造られている。ここでは2例を挙げて説明する。*Roman Holiday #968*（図3）の付属品には黒い縁取りのサングラス，イアリング，一粒のパール付きネックレス，黒いオープントーシューズ，ストロー製の赤いトークハット，白のクラッチバッグ，バッグの中にはコンパクト，ハンカチ，櫛が入っている。コンパクトは真鍮製で半径⅜インチ（0.9㎝）に過ぎないが蝶番があり開閉可能である。中には鏡がはめられ，小さなピンク色のパフが入っている。コンパクトの表面にはBという文字が彫られている。衣装は赤と白の縦縞の畝織の生地で仕立てたコート，白いベルト付きのウエスト切り替えワンピース（上身頃はコートの共布が横縞に使われ下身頃は紺色のタイトスカート）の上前身頃には5つの金色のボタンが付けられている。*Picnic Set #967*（図4）は赤と白のギンガムチェックのボディシャツ，*YKK*ファスナー使用のデニムのクラムディガーパンツ，籐製の籠と釣り竿，エンジェルフィッシュ，フェラガモ（Ferragamo）制作で有名なコルク底のウエッジシューズを再現した。シューズのソールは赤でシャツや麦わら帽子にも赤が配色されている。帽子のトップにはピンクの花，サイドには花と小さなカエルが付けられ，バレンシアガの*Calst*（1955年）を彷彿させる。また，この時期に制作された衣装にはBarbie®/ ™ ©BY MATTELというネームタグが付けられ人間の被服同様に扱われている。

このように細部までオーセンティシティを再現し美を表出したことにより，女児はバービーの衣装や付属品に魅せられた。

図３　Roman Holiday #968

図４　Picnic Set #967

図５　Evening Splendor #961

図3，4，5の出典：Eames, S. Sarah.（2006）. Barbie Fashion: 1959-1967

４．３　フォルムとファッションドール

バービーのフォルムはアカデミアでフェミニズムや摂食障害の観点から議論されている。バービーは高さ11½インチであり胸囲5¼インチ，胴囲3インチ，腰囲4¾インチである。人間の女性に換算すると胸囲37インチ，胴囲21インチ，ヒップ32インチとなる。ノートン（1996）によれば，バービーの体型を持つ人間は10万人に1人以下である。バービーは豊満な胸を持つと一般的に考えられているが極端に細い胴囲が胸を誇張し豊かに見えるに過ぎない。衣装を纏った姿の美が求められるので胴囲の細さはファッションドールの宿命である（石渡，2019）。ウィリアム・カレッジ美術史教授，オックマン（2011）は衣装の縫製上，胴囲部分には4枚布地が重なるので胴衣を細くしないと布地の厚みで胴囲が腰囲より太くなると指摘している。

例えば，1959年発売の*Sweater Girl #976*はオレンジ色ウール・アンサンブルに巻きスカートのセットアップである。巻きスカートは前身ごろに更に一枚の布地が重なるので胴囲の厚みが増す。そこに手編み感覚のオレンジ色のトップスを着せ，美しく見せるには細い胴囲が必須である。ジョンソンは胴囲の細さに頼ることなくデザインでも工夫している。1960年発売の*Busy Gal #981*はコットンブラウスとスーツである。ブラウスがスカートの下で弛み腹部が膨らむのを防ぐためボディブラウスにしている。

このようなフォルムとデザイン上の工夫により完璧な美がバービーに表出された。

５．バービーからのメッセージ

５．１　着装教育：ハイファッション，着装規範，カラースキーム

ジョンソンは1960年代バービー衣装にパリのオートクチュールを導入し，1960年代後半から1980年代には英国発祥のファッション，モッズや米国ファッション，米国社会のトレンドをバービーに体現させた。後者は衣装デザイナーのキャロル・スペンサー（Carol Spencer, 1932－）も手掛けているので，ここではジョンソンの衣装制作に焦点をあてる。

ジョンソンはシャネル，ディオール，バレンシアガ，サンローランに影響を受けている。まず，彼らのデザインについてバービー衣装集とメトロポリタン美術館所蔵のオートクチュール・コレクションを比較しながら概説し，着装教育の具体的な内容について述べる。

1926年シャネルは庶民の衣服に使われるジャージを優雅に仕立て，貧しさと豪華さの表裏一体を象徴し成功をおさめた。1939年引退し1953年カムバックし，ツィードスーツを発表した。これが女性たちのステイタスシンボルとなった。ジョンソンはこのスーツの要素をバービー衣装に取り入れた。ディオールが1946年発表した*Bar*スーツ[8]は第2次世界大戦直後，物資不足の最中，パリのオートクチュールの復活を世界に示した。1962年のバービー衣装，*After Five #934*はディオール制作のドレスに着想を得た（Boy*, 1987）。サンローランはモンドリアン（Piet Mondrian）のコンポジションをサックドレスに再現した*Mondrian Day Dress*で注目を集めた[9]（Martin, R. H., & Koda, H., 1995）。バービー

ファンでもあり衣装を提供している。バレンシアガも絵画の影響を受け「印象派」を具象した作品を発表している（Martin, R. H., & Koda, H., 1995）。バービーの衣装，*Solo on The Spotlights #982* は1951年バレンシアガ発表のサイレン・スタイルのドレスを取り入れている（Tosa, 1997）。

ジョンソンはこの4人を好み，ハイファッションをバービーに具現し，女児に洗練された美を伝えるだけではなく，着装教育に以下の点で資した。

第1にパリのオートクチュールを模倣しバービーの衣装に，*Suburban Shopper, Winter Holiday, Senior Prom* 等のタイトルを付けた。このタイトルによりTPOに応じた着装の必要性を示した，第2に衣装と付属品のセット販売によりカクテルドレスには手袋と帽子が必須である等の着装規範を明示した。第3に衣装に関する理想的なカラースキームを教示した。*Picnic Set #967*（図4）では赤色の使い方，*Evening Splendor #961*（図5）ではバッグとコートの裏地を同色のターコイズにしている。第4に女児は手持ちのバービー衣装セットを自由に組合せ，コーディネートを学べる。例えば，*Picnic Set #967* のジーンズを *Roman Holiday #968* のコートと実際に組合せ，色，素材，質感を見て，触れてコーディネートの適切さを確かめることができる。

５．２　キャリア教育

キャリアを表象するバービーについて前述したが，マテルの調査によると女児はキャリアよりも着せ替えや髪のアレンジに関心があった（Rogers, 1999）。バービー遊びが美術関係のキャリアに繋がった事実を確認しているが，バービーによるキャリアの体現に触発され，キャリアを選択したという事実は確認できなかった。しかし1960年代から1980年代前半の米国社会において女児の将来の可能性，すなわち女性の社会的役割の可視化は女児が生育環境から集積した知識を更新する機会になった。

米国では1840年代に確立された男性は家族の長，稼ぎ手，女性は家庭を守るという社会の枠組み（大辻，1994）が1930年代以降崩れ，女性労働人口が逓増した。その原因は第1に世界恐慌のため就職口が減少し，若者が居場所を求め高校に進学した。それにより，教員需要が増大した，第2にタイプライター普及により確かな英語力を持つ中産階級の白人女性の需要が高まった。その結果，女性が教員やホワイトカラー職に進出した（横尾，1992）。第2次世界大戦時下，男性が戦場に赴き，女性が労働力不足を補うため労働市場に動員されたが，戦後，男性が労働力の中枢に復帰すると女性は家庭に戻った。

1950年代には既婚女性労働人口は全既婚女性の23.8％（6歳から17歳の子どもを持つ既婚女性の28.3％，6歳以下の子どもを持つ既婚女性の11.9%）に過ぎない（US Bureau of the Census, 1975）。当時，女性が描いた将来は良い結婚相手を見つけ専業主婦になることだった（Stone, 2010）。その一方，専業主婦という将来に不満を持つ若い女性が出現し始めた時代でもあった（Stone, 2010）。マイヤーウィッツ（Meyerowitz, 1993）は1946年から1958年に発行された月刊大衆雑誌を分析し，社会には女性の伝統的役割意識と社会進出意識が混在したことを明らかにした。しかし当時普及し始めたテレビは家庭を守る母親を理想の家庭とした番組を放送した（Podnieks, E, 2016，Stone, 2010）。テレビ購入世帯の3分の2が12歳以下の子どもがいた（Gerber, 2009）。テレビは子どもにとって身近な存在であり社会への窓口だった。この時代テレビが見せない女性の生き方を表象したバービーのキャリアシリーズはこの意味で有益な情報だったと言える。バービーは社会進出を奨励したのではなく，1959年 *Barbie-Q Outfit #962*（バーベキュー），1963年 *Baby-Sits #953*（ティーンエイジャーのアルバイト，ベビーシッター）など家事や育児等も包含している。つまり女性の将来の可能性をバイアスなく女児に示したと言ってよい。

５．３　表象遊びの高度化

ベビードールの表象遊びでは女児が母親を演じ，年下のドールの世話をする。この遊びにより女児は育児が自分の将来の仕事だと刷り込まれる。バービーは女児より年齢が上なので，バービー遊びでは自分の将来の姿をバービーに投影させ，バービーと女児は一体化する。バービーの衣装から女児はアリーナを設定し，そのアリーナの予備知識を駆使し遊びが始まる。仲間と遊ぶためにはアリーナを一緒に設定しアリーナの情報を共有し，相互に承認しなくてはならない。アリーナは高校生のベビーシッターのアルバイトかもしれな

い。*Baby-Sits #953* の衣装と付属品を使い，ベビーシッターをするストーリーが構成される。ベビーシッターは身近な存在であり空想し易い。*Registered Nurse #991*，正看護師や *Pan American Airways Stewardess #984* のフライトアテンダントのアリーナは予備知識に限りがあり空想は難しい。お互いの知識をすり合わせるためのコミュニケーション力が要求される。バービーとの表象遊びはベビードールの遊びより高度かつ複雑であり未来志向型と言える。

５．４　人間形成における学び

5.1 から 5.3 は，第２次ドールリフォームのアクターが意図した学びである。ここでは女児が遊びをとおして副次的に発生した学びについて言及する。

バービーの１人遊びについて言及する。“Barbie Culture”（Rogers, 1999）から子どもの１人遊びを分析すると２つに分類できる。第１はバービーによる代行行為である。自分には不可能な海外旅行，スポーツをバービーに代行させるという簡単なものもあれば，子どもが実世界では許されない道徳に反する行為をバービーに空想の世界で代行させる。あたかも自分が犯したような感覚にとらわれ，子どもは後悔と自責の念に駆られる。その後，自分の空想と再認識し安堵する。反対に勇気がなく行動に移せない英雄的行為をバービーに代行させることもある。第２はバービーを自分が必要とする人間に見立てる行為である。孤独なときにはバービーに話しかけ，心を慰めてもらう。怒りに震え，感情を抑制できないときには友人や家族にはできない暴力的行為をバービーに向け，鬱憤を晴らす。

以上の行為はバービーが女児よりも年上のドールであり自分を守ってくれる存在だから成立する。１人遊びで，自分の内面に向き合い感情的行動を抑制したり，空想でバービーに代行させた行為を内省し，道徳観を養った。

次にランド（1995）とロジャーズ（1999）の聞き取り調査から 1960 年代から 1980 年代にバービーと遊んだ当時の女児の回想を分析する。

まず，手作りのバービー衣装から女児が示した洞察力，観察力について述べる。女児を喜ばせようと母親が作成したバービー衣装を差し出すと，ネームタグや付属品がないと言って癇癪を起こす女児がいた（Rand et al, 1995）。ネームタグや付属品の有無が問題ではなく，母親手製の衣装の低い完成度に対する素直な反応とも考えられる。ジョンソンの表出させたオーセンティシティと精巧さ，美的外観を演出する工夫がなされた衣装と比較し失望したのだろう。つまり女児は衣装を観察し，審美性を評価したと言える。また，友人宅でバービーと遊び，友人の所有する衣装や関連グッズの豊富さに圧倒され，人生の早い段階で社会経済上の格差を感じ取ってしまった。このような女児にとって母親の被服の余り布で作られた衣装（Rand et al, 1995）は母親をバービーに具象させてしまい，バービー本来の魅力を消失させた。一方，祖母や母親が自分のために衣装を制作してくれた行為や彼女たちが自分に衣装制作を手解きした行為が嬉しく，大人になりバービーを見るたびに幸せな思い出が蘇るという回答もある（Rogers, 1999）。これは女児がバービーをとおして祖母や母親の愛情を感じ取る力，祖母や母と繋がる喜びを認識する力があった。

前者は社会，環境，モノの観察力，後者は他者の内面に対する洞察力と言える。

友人とのバービー遊びから，社交性やコミュニケーションスキルを学んだ女児もいる。学童後期の女児の間ではバービーを持って友達の家にスリープオーバーするのが定番の遊びだった。社交性に欠ける女児がバービー遊びをきっかけにし，コミュニケーションスキルを向上させ，友人関係を構築できた（Rogers, 1999）という証言もある。これはバービー遊びが高度化しているからこそ，達成されたと言える。

以上，バービー遊びを通じて道徳観，審美眼，洞察力，コミュニケーションスキルを涵養させた女児がいたことを補足する。これはハンドラーやジョンソンが意図したことではなく第２次ドールリフォームの教育上の副産物とも言える。

５．５　バービー遊びをした女児の属性

5.1 から 5.4 の学びを得た女児は米国社会の一定の社会的経済的層に属していた。1973 年３歳から 11 歳の女児の 60％がバービーを持っていた（Handler & Shannon, 1994）が，経済的な理由でバービーを買ってもらえなかった女児も多い。運よく親類から古いバービーを譲り受けることができバービーで遊べた女児もいる。

本稿の研究対象年代は米国の人種・性差別抗議運動の時代であった。女性の伝統的役割意識と社会進出意識が混在している時代であり，フリーダンが社会における新しい女性の役割を掲げ，女性解放運動が活発化していた。マテルを創設したハンドラー自身，ガラスの天井ではなくコンクリートの天井があったと当時を回想している。漸く米国社会は教育の機会均等を目指し，1964年公民権法，ヘッドスタート計画，1965年初等中等教育法，1971年人種統合バス通学等を制定した。「人種統合バス通学」はホワイトフライト現象を起こし，白人が公立学校を離れ公教育の質が低下した（湯藤，2008）。バービーと遊んだ女児の大方が郊外に居住する中級階級の白人の家庭だったと考えてよい。というのは，1990年代にチン（2001）によるコネチカット州ニューヘイヴンのアフリカ系アメリカ人が多く居住する地域におけるバービー調査では，子どもたちはバービーを所有せず，依然として差別に晒されバービーどころか自分の所持品すらなかった。ロジャーズの聞き取り調査でも回答者が中流階級，白人という属性が散見する。回答者にはフェミニズムや摂食障害の観点でバービーを批判した研究者や蒐集家[10]も多く含まれ，彼らもまたバービーと遊んだ経験を持つ。

1980年代バービーとその関連グッズはそのような属性を持つ女児の間でさえもステイタスシンボルだった（Rogers, 1999）。学童期に遊んでいたバービーを覚えているかという質問にバービーのシリーズ名や衣装名を具体的に挙げる回答者が多い（Rand et al, 1995）のはバービーが回答者の重要な財産だったからだろう。

1959年から1980年代前半，バービーと遊んだ女児の社会経済層の属性は限定的である。

6．終わりに

18世紀中葉，マリー・アントワネットのドレスをデザインしたローザ・ベルタン（Rose Bertin）がクチュリエとして活躍していた頃（Jacob, 1995），パリで造られたドールはファッションを国外に伝える重要なメディアだった。しかし19世紀になりフランスではオートクチュールとドールとの関係は希薄になる（Peers, 2004）。

20世紀バービーの出現は再びオートクチュールとドールを結びつけた。ジョンソンがオーセンティシティとディテールに拘り制作した衣装が女児を惹きつけた。女児はバービーにより配信されたファッションに触れ，着装規範意識を醸成した。1960年代から1980年代前半の女性の社会進出黎明期，かつ情報が限定的だった社会において，バービーは女児の将来の可能性を可視化するメディアとなった。バービー遊びは従前のドール遊びを高度化した。この遊びをとおしコミュニケーションスキルを養成し人間関係を構築できた女児もいる。バービー遊びは人格形成期において社会性や道徳性を涵養する一助ともなった。

ファッションと女性のフォルムを結合した小型のドールの普及を本稿では第2次ドールリフォームと捉え，このドールの教育的意義を明らかにし，ルース・ハンドラーとシャーロット・ジョンソンがこのリフォームのアクターだったことを説明した。
バービーの教育的意義は時代とともに変化する。紙幅の関係上，他の時代については別稿に纏める。

注

1　第2次世界大戦後好況を迎え，若者向けの美容製品宣伝用のドールが出回った；*リトル・ミス・レブロン*（*Little Miss Revlon*），*コティー・ガールズ*（*Coty Girls*）等；流行の衣装や化粧を纏い，胴囲の括れやバストがあるがフォルムは幼児に近く童顔

2　Billy Boy*，宝石デザイナー，バービー蒐集家，アーティスト：Fondation Tanagra：http://www.fondationtanagra.com/en/article/bild-lilli-and-the-queens-of-outer-space

3　漫画からドール制作例：1920年代朝日新聞連載，正ちゃん人形，1930年代パラマウント映画製作ベティ・ブープ（*Betty Boop*）ドール等。子どもを対象に制作。*リリ*は漫画も大人を対象。

4　インフレーションカリキュレータによると2020年の貨幣価値としては49,242ドル。

5　Chouinard Art Institute：ウォルト・ディズニーがアニメーターを研修させた。

6　1966年にバービーの睫毛植毛特許申請。

7　日本滞在期間は諸説ある。滞在した帝国ホテルウエブサイトまた宮塚（2011）を参考にした。

8　ジャッケトは10枚のティーカップ型で構成。裾部分（胴囲部分以下）を広げると半円になる。半円

の周囲の長さは胴囲の3倍。*Bar*スーツのボトムはプリーツスカートで丈は90㎝，プリーツ幅は4㎝，5m30cmの生地使用。1997年Christian Dior Barbie® Doll　#16013：Barスーツ着用。Victoria and Albert Museum Fashion unpicked: The 'Bar' suit by Christian Dior. Retrieved on May 20, 2020 from https://www.vam.ac.uk/articles/fashion-unpicked-bar- suit-dior

9　THE MONDRIAN DRESS THAT MADE YVES SAINT LAURENT RICH! By Loic Prigent（2019）https://www.youtube.com/watch?v=0vsvIThDTn0. サンローラン博物館には *Barbie® Yves Saint Laurent Doll# GCM97*（2018年発売）が展示されている。

10　蒐集家には子ども時代バービーと遊んだ経験のあるものと経済的理由からバービーを持てなかった者がいる。概して高学歴高収入の者が多いというFulkersonによる研究結果をRogersは引用している。

参考文献

Boy, B. (1987). Barbie: Her Life & Times: and the New Theater of Fashion with Dolls, Documents & Designs from the Billy Boy* Collection. Crown Trade Paperbacks.

Chudacoff, H. P. (2007). Children at play: An American history. New York: NYU Press.

Chin. E. (2001). Feminist Theory and the Ethnography of Children’s Worlds: Barbie in New Haven, Connecticut. In Schwartzman, H. (Ed.) (2001). Children and Anthropology. Perspectives for the 21st Century. Westport, Connecticut & London: Bergen & Garvey.

Eames, S. Sarah. (2006). Barbie Fashion: 1959-1967 (Vol. 1). Collector Books.

ECSIP Consortium. (2013). Study on the Competitiveness of the Toy Industry. Netherlands: ECORYS. Retrieved June, 1, 2014.

Gerber, R. (2009). Barbie and Ruth: The story of the world's most famous doll and the woman who created her. New York, NY: Collins Business.

Handler, R., & Shannon, J. (1994). Dream Doll: The Ruth Handler Story. Longmeadow Press.

Hunter, D., & Lastowka, F. G. (2015). Barbie. Tul. J. Tech. & Intell. Prop., 18, 133.

Jacobs, L. (1995). The Art of haute couture. Abbeville Press.

Le Musée de la Maison de Poupée de Bâle présente Sur le podium au fil du temps :Barbie® et la mode

Martin, R. H., & Koda, H. (1995). Haute couture. Metropolitan Museum of Art.

Meyerowitz, J. (1993). Beyond the feminine mystique: A reassessment of postwar mass culture, 1946-1958. The Journal of American History, 79(4), 1455-1482.

Norton, K. I., Olds, T. S., Olive, S., & Dank, S. (1996). Ken and Barbie at life size. Sex roles, 34(3-4), 287-294.

Ockaman, C. (2011). Barbie Meets Bourguereau. In McDonough, Y. Z. (Ed.). (2011). The Barbie Chronicles: A Living Doll Turns Forty. Simon and Schuster.

Oppenheimer, J. (2009). Toy monster: The big, bad world of Mattel. John Wiley & Sons.

Peers, J. (2004). The fashion doll: from Bébé Jumeau to Barbie. Berg.

Podnieks, E. (Ed.). (2016). Pops in Pop Culture: Fatherhood, Masculinity, and the New Man. New York: Palgrave Macmillan.

Rand, E., Barale, M. A., Moon, M., & Goldberg, J. (1995). Barbie's queer accessories. Duke University Press.

Rogers, M. F. (1999). Barbie culture. Sage.

Spencer, C. (2019). Dressing Barbie: A Celebration of the Clothes That Made America’s Favorite Doll and the Incredible Woman Behind Them. HarperCollins.

Stone, T. L. (2010). The Good, the Bad, and the Barbie: A Doll's History and Her Impact on Us. Penguin Group.

Tosa, M. (1998). Barbie: four decades of fashion, fantasy, and fun. Harry N Abrams Inc.

U.S. Bureau of the Census. (1965).1960 Census: Population, Supplementary Reports: Per Capita and Median Family Income in 1959, for States, Standard Metropolitan Areas, and Counties

U.S. Bureau of the Census. (1975). Historical statistics of the United States, colonial times to 1970 (No. 93). US Department of Commerce, Bureau of the Census

Whitaker, H. (2018). A cultural history of the ponytail. Retrieved on May 24, 2020 from https://www.bbc.co.uk/bbcthree/article/361f113b-7edd-4589-8d2f-f1292537e1ba

Zinsser, W. K. (1964). Barbie Is a Million Dollar Doll. Saturday Evening Post, 12, 72-73.

石渡圭子（2019）将来に生き残る玩具―バービーのMI 理論的意義―日本人形玩具学会会誌．Vo.30. p.100－p.109

桑原ヒサ子．（2015）．ドイツ人女性の戦後：「零時」からの出発（第二次世界大戦下の大衆メディアにおけるジェンダー・民族表象の国際比較）．*人文社会科学研究所年報*，（13），1－20.

今野順夫．（1985）．西ドイツにおける婦人労働者の実態と法的規制：賃金格差の諸要因．*社会政策叢書*，9，233－256.

宮塚文子（2011）．バービーと私―着せ替えドレスを作り続けた半生記：亜紀書房

湯藤定宗．（2008）．アメリカ合衆国における教育改革に関する一考察―ミネソタ州を事例として．*帝塚山学院大学研究論集 文学部*，43，89－102.